

「地方自治論：社会科学系好コラム」 選出3本!!

市町村合併と一体感

私が住む下野市は、いわゆる「平成の大合併」の流れの中で、2006年に石橋町、南河内町、国分寺町が合併して誕生した。2016年には新庁舎が完成し、新鮮な食材などを買える「道の駅しもつけ」も人気を集めている▼しかし私は、合併から10年以上が経過したにもかかわらず、いまだに「下野市」に愛着を持たずにいる。というのも、地元の旧石橋町とそれ以外の旧南河内町、旧国分寺町とが同じ市でないように感じてしまうのだ▼これは、「距離」に原因があると考えられる。まず、物理的な「距離」である。下野市では、市役所は市の中心である旧南河内町にある。そのため、遠くの市役所に赴かなければ、ほとんどの手続きを行うことができなくなってしまった▼そして、中心部から遠いことは、自分たちの住む場所は「端」になってしまったのだ、という心理的な「距離」をも生み出す。合併によって、昔からあるイベントが中心部と交互の開催となったり、吸収されたりしたことも相まって、中心部以外はないがしろにされていると感じるようになってしまう▼さらに、各町の雰囲気や文化が大きく違っていたことも心理的「距離」を感じさせる一因になったといえる。もともと、各町にはそれぞれの別の駅があり、大学病院や歴史的史跡の有無など、地域の色が異なっていた。そのような3町が合併したことも、市に一体感がない状態に影響している▼平成の大合併は、財政基盤の確立や業務の効率化などを目指して行われたが、そこに暮らす住民たちの気持ちは置き去りにされていると感じる。合併したことで、3町は下野市という一つの市になった。しかし、本当の意味で一つになるには、まだ時間がかかりそうだ。

「地方自治論：社会科学系好コラム」 選出3本!!

コミュニティバス不要論

例えば自宅近くのコンビニに行くとき、あなたはどのような手段を用いるだろうか。この場合多くの人を選択するのは徒歩か自転車だろう。しかし、私の地元ではほとんどの人がその選択肢を考慮することなく自動車一択になる▼一家に複数台の自家用車を持ち、人口減少も進むわが町の路線バスは、約一時間に一本の割合で走っている路線しか存在しない。このほか、町内の医療機関を巡回するバスが運行しているが認知度は低い。現在町では、公共交通についてアンケートを実施している。これは買い物等の移動を支援する公共交通が運行されていない状況を踏まえ、これからの公共交通機関のあり方について検討することを目的としている▼これからの公共交通機関のあり方を考えるなかでコミュニティバスの運行を開始した身近な例として、隣接する市が挙げられる。市ではにぎわいのある街づくりを推進しており、今後観光客を積極的に呼び込むためにも市内の主要施設をめぐることでできる交通機関が必要となっていることから運用を始めた▼わが町でも導入を検討するという。コミュニティバスを運用している自治体が増えているのは確かだが、人口減少が進行する町にそのバスを走らせるのは、期待できる効果に対して少々コストがかかりすぎるのではないか。しかし高齢者や学生など公共交通機関を必要としている人がいるのは事実なので、私が提案したいのは「タクシーをより簡単に利用できるようにすること」だ。柔軟なタクシーの使い方のモデルを作り上げ、コストを出来る限り抑えて課題解決することが町民のためになると考えられる。このことから、私は安易なコミュニティバス導入は不要だと考える。

「地方自治論：社会科学系好コラム」 選出3本!!

被災者帰れ

「被災者帰れ」。この一言から始まった。東日本大震災による東京電力福島第一原子力発電所事故から二年が過ぎようとしていた平成24年12月に、福島県いわき市の市役所の玄関などで双葉郡からの原発事故避難者に対する非難の落書きが見つかった▼いわき市は、避難区域に近く、気候も温暖でとても住みやすい町であった。現在そのいわき市には、2万1000人以上もの避難者が暮らしている。いわき市で生まれ育った私でさえその変化は感じている▼現在いわき市では、いわき市の住民と双葉群から非難してきた住民との間の分断という問題が課題として挙げられている。落書きが見つかった際に、当時の市長であった渡辺敬夫市長が、「東京電力から賠償金を受け、多くの人が働いていない。パチンコ店もすべて満員だ。避難者は医療費が無料なので、市内の医療機関は大変な患者数である。」とコメントをした。市長でさえ、こういった発言をしてしまうのである▼事故から7年過ぎた現在では、こういった問題を報道する事はなくなったが、分断という問題が解決したとはいえない。▼問題解決の糸口は見つかるのか。事故当時通っていた中学校に、多くの避難者が転校してきた。勉強や部活をして共に生活をした。時々彼らから、故郷を奪われたことのつらさやこういった避難者への非難に対する不安を直接聞くこともあった。私はそのとき彼らに寄り添ってあげたいと心から感じた▼双葉郡の一部地域は、避難区域の解除はされたが多くの避難者が定住化を希望している。避難者の話に耳を傾け、市民として迎えて寄り添って生活が出来る日はいつになるのだろうか。